（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	田崎　郁子
論文題目	タイ北部プロテスタント派カレン地域における宗教実践と社会経済関係の動態		

（論文内容の要旨）

本博士論文の目的は、タイ国北部山地で換金作物栽培に従事する少数民族カレンのプロテスタント・キリスト教徒居住地域において、キリスト教の宗教実践と生産活動や社会経済的関係をめぐる日常生活との相互作用を人類学的に考察することである。東南アジアにおけるキリスト教宣教や改宗に関する人類学的先行研究は、そのほとんどが改宗と民族境界・エスニシティや、教義とイデオロギーのローカル化の様態に着目し、キリスト教の受容と変容を分析してきた。一方、アフリカなど他地域の研究では、キリスト教実践が生活スタイルや社会のあり方そのものをも再編してきたことが指摘されている。本研究では、これを踏まえ、改宗後既に三世代余が経過したキリスト教徒カレン地域を対象に、換金作物栽培と教会活動が大きな比重を占める村人の日常生活において、労働や蓄財、互助関係をめぐる価値や、役割分業とリーダーシップがどのように再編され規範化されてきたか、社会経済的関係の変化の過程とともに分析する。調査地域であるチェンマイ県ボケオ地区のキリスト教徒カレンは、多大な初期投資と労働力投入を必要とする換金作物であるイチゴの栽培に従事しており、その生業がもたらす新たな生活スタイルと、教会で説かれる労働規範や援助・慈善にまつわる概念とが相互作用して、社会の変容が生じている。その過程で既存の規範や生活スタイル、社会編成・秩序のあり方がどのように持続・変容し、新たなコミュニティを現出させているのかを分析し明らかにすることが本論文の課題である。序章では、以上の目標や先行研究を紹介する。

第1章では、まずビルマとタイにおけるバプテスト宣教の歴史を概観する。次に、調査地ボケオ地区とM教会における1930年代から2000年代までの宣教活動の過程を追い、ここが北タイにおけるカレン・バプテストの指導的拠点であったため、キリスト教言説が規範となって現れやすい地域であると論じる。また、ボケオ地区でバプテスト教会主導の宣教・開発と、タイ行政、国際NGOによる開発とが相乗的な効果を生みだしながら山地の開発が進み、それがカレンの労働や互助と贈与の概念にも影響を与えてきたことを示す。

第2章では、今日見られる教会組織の概要や活動内容、信徒の教会生活について記述する。そして、教会では献金を捧げ、安息日を守り、教会活動に奉仕すべきことなどが規範化されており、これがイチゴ栽培をめぐる労働と拮抗状態を生じさせることを明らかにする。

第3章では、ボケオ行政区で換金作物としてのイチゴ栽培が浸透してきた歴史的な経緯と社会文化的な背景を明らかにし、そのなかでイチゴ栽培によって変容する労働環境や社会経済的関係の変化について論じる。バプテスト宣教活動とその後の様々な開発プロジェクトの導入を経たM集落には多様な換金作物や技術革新を受容しやすい土台が既にあり、高収入を獲得できるイチゴ栽培は瞬く間に広まり、村の労働環境は変容をとげた。また、イチゴ栽培による現金収入と宣教活動による教育の推進を背景に、村では世話役業や店舗経営、給与所得で生活をする富裕層、イチゴを自家栽培する中間層、イチゴの自家栽培すら難しく日雇いで暮らす貧困層へと階層分化が進行してきた。特にイチゴ栽培が浸透する中で生成した世話役という新しい業態は、桁外れの富の蓄積を可能にし、その富に依拠した新たな指導者層を生みだすことにもつながったことを指摘する。

第4章では、バプテスト宣教のもたらした宗教実践と、イチゴ栽培の導入とが相互作用する中で形成されてきた新しい労働規範や性別・年齢別役割分化に着目する。まず、具体的な事例に即して、イチゴ栽培に従事するキリスト教徒の村人にとって、勤勉で経済合理的な労働姿勢や生活の律し方、生産・再生産労働や教会活動をめぐりジェンダー・年齢に基づく分業化が進んだこと、また時間や貯蓄の概念が変容してきたことを詳述する。そして、新たに形成された労働規範の影響を受ける一方で、村人はイチゴ栽培を通じて合理的経営に従事するようになり、それが教会活動への参与の仕方や信仰実践にも変容を迫るようになったこと、労働と教会活動への参与のバランスをめぐって村人の実践が多様に分岐することを指摘する。以上より、労働をめぐる生活実践の中で、社会関係を維持・形成しながら生産・再生産労働に携わり、かつ教会活動に参与することが規範化され、それが時間と労働力の拮抗状態を生じさせていることを示す。

第5章では、教会活動や説教で多用されるマチュ（助ける） というカレン語に着目し、キリスト教のもたらす援助や奉仕、施しという一方的贈与の倫理観が、マチュという概念内容の拡大を通してどのように変化し、村人に受け入れられているのか、その過程を分析する。まず、「マチュ」というカレン語が、顔の見える相互扶助を示すものであったこと、同じ言葉が、キリスト教のもとで、神や教会活動への抽象的で見返りを求めない労働奉仕や献金拠出へとその意味範囲を拡大させてきたことを指摘する。さらにこのように拡大した意味領域をもつマチュが、日常生活において頻繁に言及され、規範化されてきたことを示す。そして、イチゴ栽培の導入によって経済的階層分化が明瞭に現れ、その中で村内の持てる者が持たざる者を生活の多方面で支援するという規範が強化されてきたことを論じる。イチゴ栽培の世話役－契約農民関係が、マチュの言説によってどのように語られるかを考察し、世話役のリーダーシップを支えるのは、単なる経済合理性の追求ではなく、マチュを通じた倫理規範とそれに基づく村への貢献という志向性であることを明らかにする。

以上より、教会生活のみならず生産労働、村内のリーダーシップ、世帯内の家事労働など、一見異なる領域がキリスト教的価値観に結び付けられ強い道徳規範が形成されていること、そしてイチゴ栽培を通じて経済階層の分化が進み、村の人々の志向性が拡散し、村の統合性が弱体化してゆきかねないところを、マチュの表す倫理が村の発展を強調しつつ共同性へとつなぎとめる力として作用していることを明らかにする。そして、労働や蓄財をめぐる教会規範とマチュという概念の検討から、プロテスタント・キリスト教の受容は、社会関係に埋め込まれたセルフから脱社会化した合理的個人へ変化をもたらすという一方向的な近代化論とは異なり、経済合理主義をもたらす一方で、それによって生じるコミュニティ内の葛藤や拮抗に対処し、コミュニティを強化する規範や価値を形成していることを論じる。

終章では、以上の議論を総括し、本論がキリスト教受容の研究に対する貢献として、キリスト教の実践や倫理が、日常生活や生業活動への関わりを通じて、社会経済生活における規範を再編してきた過程を明らかにし、それにより、キリスト教と近代化論のオルタナティブな方向を示したことであるとしめくくる。

（続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

本博士論文は、北部タイ山地にてプロテスタント・キリスト教を受容して数世代を経た少数民族カレンの居住する地域において、住民が、換金作物栽培を取り入れて経済的に発展を遂げるなかで、労働、相互扶助、奉仕と教会活動をめぐる倫理規範を通じて、社会経済的関係と日常生活を再編してきた過程について論述している。それにより、人類学におけるキリスト教研究と、東南アジアにおける農村社会発展論に寄与するものである。タイ語とカレン語能力を駆使した長期滞在調査による詳細な収集データを提示・分析する、民族誌的な成果である。

東南アジア大陸部においてキリスト教の研究は、これまで少数民族のアイデンティティとキリスト教受容を関連づけ、あるいは、そのローカルな教義信仰を論じるものが主流であった。一方、この15年ほどの間に人類学においてキリスト教研究は盛んになり、その関心領域も広がっており、本論文もその流れに位置づけられる。北部タイ山地の少数民族地域では、自給自足的な農業ばかりが議論の対象とされてきたのに対し、調査対象地域では、イチゴ栽培という多大な初期投資と労働力を必要とする換金作物栽培が導入されてきた。本論文は、それによって生じる社会経済的な変化が、キリスト教の実践によっていかに方向づけられてきたかを論じている。まず、日常生活の変化として、世帯内の男女役割分業の生成、労働規範の強化、生業の再編、蓄財と経済的階層化の進展を指摘している。しかし、これにより教会活動と生産活動とが競合し、教会への献金要請と資本蓄積への願望とが拮抗するという価値の相克が生じている。現地キリスト教徒カレンが個々にこうした状況に対処する過程で、教会と村落社会への奉仕や貢献を称揚する新たな倫理が形成されていること、また、階層化による社会関係の変化に対して、村落社会の秩序を再生産するリーダーシップが形成されていることを分析している。このように、キリスト教の実践や倫理は、現地の社会経済的関係や価値との相互作用により、近代化と経済合理主義のみならず、それによって生じるコミュニティへの負荷に対応する独自の規範や価値をもたらしていることを具体的な数値データを用いて分析し、説得的に論じている。

本論文は、以下の四つの学術的貢献によって評価することができる。第一に、大陸部山地民族誌への貢献である。北部タイ山地の少数民族については、従来、収益性の高い換金作物栽培に携わり、市場を操るほどに機敏に立ち回る一部の民族と、自給的稲作と伝統維持を重視しながら換金作物には奥手なカレンなどの民族との対置が強調され、そのステレオタイプを脱却する説得的な事例は、十分に提示されてこなかった。本論文は、そうした本質主義に陥りがちな議論に対して、真逆の事例を示し、民族ステレオタイプで山地の生業を語ることへの警鐘を鳴らしている。それは、変動著しく多民族が共生する同地域の理解に重要な視座を提供するものである。

第二に、綿密なデータ収集能力に裏打ちされた生業分析により、換金作物の導入過程を明らかにしたことである。調査村を中心とした多民族の共生する地域にどのようにイチゴ栽培の技術やノウハウが導入されたかを丁寧に記述した上で、大きな初期投資と集中的な労働投入を求めるこの作物を巡る世帯経済を分析し、労働の時間配分、地域の民族間関係、村の中の階層関係、価値観など、生活の細部に至るまで再編されていく社会文化的過

程を具体的な数値と図表で示し、検証している。

第三に、新しい着眼によりキリスト教徒の日常生活に迫るキリスト教研究への視点と分析の貢献である。北部タイのカレン・バプテスト教会の中でも先進的な村を調査地に選び、教会予算の帳簿に分け入り、献金の金額や使途について明らかにしている。従来のキリスト教研究が、ともすれば信仰内容や教義など抽象的な上部構造の考察に偏りがちであったのに対して、生業と収入、蓄財、献金などの下部構造と社会的威信やリーダーシップとの関係を、具体的な金額や数値によって明らかにしている。そして、教会活動の持つ意味を、階層や性別・年代別にとらえ、蓄財や時間の配分、性別役割などについて、キリスト教受容が日常生活にもたらす顕著な傾向を、詳細なデータに基づき、具体的に活き活きと描き出すことに成功している。

このように生業とキリスト教徒の日常生活の双方に関わるきめ細かいデータ収集は、イチゴ栽培が必要とする労働やそのもたらす蓄財と、キリスト教実践が要請する時間や財の配分との相克の分析をより説得力のあるものとしている。顔の見える民族誌でありながら、同時に数値データと図表を駆使して、実証研究の高いスタンダードを示している。

第四に、人類学におけるキリスト教研究の議論への貢献である。本論文は、現地語の「マチュ」（助ける）という語彙を取り上げ、従来は、相互扶助という意味合いで用いられてきたこの言葉が、調査地のキリスト教村落では、弱者への支援、そして教会や村への奉仕を包含する意味へと拡張されてきたことを明らかにしている。そして労働の成果としての財を献金として捧げ、教会活動に奉仕することが新たな価値を帯び、換金作物の導入により階層化の進行が村の秩序を改変していくことに対して、マチュの概念の拡大と言説化が緩衝作用をもたらしていること、それによって新たなリーダーシップが再編されていることを描き出している。市場経済に参入し包摂されていく過程で、キリスト教受容を通じて拡大再編された支援や奉仕の社会規範が、階層化による社会再編を方向付けていることを分析している。こうした議論は、近年の、キリスト教の宗教実践と慈善や贈与の関係を問う一連の研究に貢献するものである。

これらの点を総じて、本論文は、その実証的で綿密な農家経済データと濃密な民族誌的記述に基づき、北部タイ山地の生業と経済生活に関する民族誌としてのみならず、キリスト教の人類学や宗教研究の議論に大いに貢献するものである。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年12月21日、論文の内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。